国語

（解答番号 1 ～ 36）

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に 1 ～ 15 の番号を付してある。

(配点 50)

1 僕は普段からあまり一貫した思想とか定見を持たない、いい加減な人間なので、翻訳について考える場合にも、そのときの気分によって二つの対極的な考え方の間を揺れ動くことになる。楽天的な気分のときは、翻訳なんて簡単さ、たいていのものは翻訳できる、と思うのだが、悲観的な気分に落ち込んだりすると、翻訳なんてものは原理的に不可能なのだ、何かを翻訳できると考えることじたい、言語とか文学の本質を弁(わきま)えていない愚かな人間の迷妄ではないか、といった考えに傾いてしまう。

2 まず楽天的な考え方についてだが、翻訳書が溢(あふ)れかえっている世の中を見渡すだけでいい。現実にはたいていのものが――それこそ、翻訳などとうてい不可能のように思えるフランソワ・ラブレー(注1)からジェイムズ・ジョイス(注2)に至るまで――見事に翻訳されていて、日本語でおおよそのところは読み取れるという現実がある。質についてうるさいことを言いさえしなければ、確かにたいていのものは翻訳されている、という確固とした現実がある。

3 しかし、それは本当に翻訳されていると言えるのだろうか。フランス語でラブレーを読むのと、渡辺一夫(注3)訳でラブレーを読むのとでは――渡辺訳が大変な名訳であることは、言うまでもないが――はたして、同じ体験と言えるのだろうか。いや、そもそもそこで「同じ」などという指標を出すことが間違いなのかも知れない。翻訳とはもともと近似的なものでしかなく、その前提を甘受したうえで始めて成り立つ作業ではないのだろうか。などと考え始めると、やはりどうしても悲観的な翻訳観のほうに向かわざるを得なくなる。

4 しかし、こう考えたらどうだろうか。まったく違った文化的背景の中で、まったく違った言語によって書かれた文学作品を、別の言語に訳して、それがまがりなりにも理解されるということじたい、よく考えてみると、何か奇跡のようなことではないのか、と。翻訳をするということ、いや翻訳を試みるということは、この奇跡を目指して、奇跡と不可能性の間で揺れ動くことだと思う。もちろん、心の中のどこかで奇跡を信じているような楽天家でなければ、奇跡を目指すことなどできないだ

ろう。「翻訳家という楽天家たち」とは、青山南(注4)さんの名著のタイトルだが、A翻訳家とはみなその意味では楽天家なのだ。

5 もちろん、個別の文章や単語を(ア)タンネンに検討していけば、「翻訳不可能」だと思われるような例はいくらでも挙げられる。例えばある言語文化に固有の慣用句。昔、アメリカの大学に留学していたときに、こんなことを実際に目撃した記憶がある。中年過ぎの英文学者が生まれて始めてアメリカに留学にやって来た。本はよく読めるけれども、会話は苦手、という典型的な日本の外国文学者である。彼は英文科の秘書のところに挨拶に顔を出し、しばらくたどたどしい英語で自己紹介をしていたのだが、最後に辞去する段になって、「よろしくお願いします」と言おうと思って、それが自分の和文英訳力ではどうしても英訳できないことにはたと気づき、秘書の前に突っ立ったまま絶句してしまったのだ。

6 「よろしくお願いします」というのは、日本語としてはごく平凡な慣用句だが、これにぴったり対応するような表現は、少なくとも英語やロシア語には存在しない。もっと具体的に「私はこれからここで、これこれの研究をするつもりだが、そのためにはこういうサーヴィスが必要なので、秘書であるあなたの助力をお願いしたい」といった言い方ならもちろん英語でもあり得るが、具体的な事情もなくごく(イ)バクゼンと「よろしくお願いします」というのは、もしも無理に「直訳」したら非常に奇妙に(ウ)ヒビくはずである。秘書にしても、もしも突然やってきた外国人に藪(やぶ)から棒にそんなことを言われたら、付き合ったこともない男からいきなり「私のことをよろしく好きになってください」と言われたような感覚を覚えるのではないだろうか。

7 このような意味で訳せない慣用句は、いくらでもある。しかし、日常言語で書かれた小説は、じつはそういった慣用句の塊のようなものだ。それを楽天的な翻訳家はどう処理するのか。戦略は大きく分けて、二つあると思う。一つは、律儀な学者的翻訳によくあるタイプで、一応「直訳」してから、注をつけるといったやり方。例えば、英語で“Good morning!”という表現が出てきたら、とりあえず「いい朝！」と訳してから、その後に(訳注　英語では朝の挨拶として「いい朝」という表現を用いる。もともとは「あなたにいい朝があることを願う」の意味)といった説明を加え、訳者に学のあるところを示すことになる。しかし、小説などにこの種の注が(エ)ヒンシュツするとどうも興ざめなもので、最近特にこういったやり方はさすがに日本でも評

判が悪い（ちなみに、この種の注は、欧米では古典の学術的な翻訳は別として、現代小説ではまずお目にかからない）。

8 では、どうするか。そこでもう一つの戦略になるわけだが、これは近似的な「言い換え」である。つまり、同じような状況のもとで、日本人ならどう言うのがいちばん自然か、考えるということだ。ここで肝心なのは「自然」ということである。翻訳といえども、日本語である以上は、日本語として自然なものでなければならない。いかにも翻訳調の「生硬」な日本語は、最近では評価されない。むしろ、いかに「こなれた」訳文にするかが、翻訳家の腕の見せ所になる。というわけで、イギリス人が「よい朝」と言うところは、日本人なら当然「おはよう」となるし、恋する男が女に向かって熱烈に浴びせる「私はあなたを愛する」という言葉は、例えば、「あのう、花子さん、月がきれいですね」に化けたりする。

9 僕は最近の一〇代の男女の実際の言葉づかいをよく知らないのだが、英語のI love you.に直接対応するような表現は、日本語ではまだ定着していないのではないだろうか。そういうことは、あまりはっきりと言わないのがやはり日本語的なのであって、本当は言わないことをそれらしく言い換えなければならないのだから、翻訳家はつらい。ともかく、そのように言い換えが上手に行われている訳を世間は「こなれている」として高く評価するのだが、厳密に言ってこれは本当に翻訳なのだろうか。**B**翻訳というよりは、これはむしろ翻訳を回避する技術なのかも知れないのだが、まあ、あまり固いことは言わないでおこう。

10 あまり褒められたことではないのだが、ここで少し長い自己引用をさせていただく。

11 『屋根の上のバイリンガル』という奇妙なタイトルを冠した、僕の最初の本からだ。一九八八年に出て、あまり売れなかった本だから、知っている読者はほとんどいないだろう。

12 「……まだ物心つくかつかないかという頃読んだ外国文学の翻訳で、娘が父親に『私はあなたを愛しているわ』などと言う箇所があったことを、今でも鮮明に覚えている。子供心にも、ああガイジンというのはさすがに言うことが違うなあ、と妙な感心こそしたものの、決して下手くそな翻訳とは思わなかった。子供にしても純真過ぎたのだろうか、翻訳をするのは偉い先生

に決まっているのだから、下手な翻訳、まして誤訳などするわけがない、と思い込んでいたのか。それとも、外国人が日本人でない以上、日本人とは違った風にしゃべるのも当然のこととして受け止めていたのか。今となっては、もう自分でも分からないことだし、まあ、そんな詮索はある意味ではどうでもいいのだが、それから二〇年後の自分が翻訳にたずさわり、そういった表現をいかに自然な日本語に変えるかで(自然というのがここでは虚構に過ぎないにしても)四苦八苦することになるだろうと聞かされたら、あの時の少年は一体どんなことを考えただろうか。自分の読んでいる翻訳書がいいものと悪いものに分かれるなどとは夢にも思わず、全てが不分明な薄明のような世界に浸りながら至福の読書体験を送ったかつての少年が後に専門として選んだのはたまたまロシア語とかポーランド語といった『特殊言語』(注5)であったため、当然、翻訳の秘密を手取り足取り教えてくれるようなアンチョコ(注6)に出会うこともなく、始めはまったく手探りで、それこそ『アイ・ラヴ・ユー』に相当するごく単純な表現が出て来るたびに、二時間も三時間も考え込むという日々が続いていたのだった……」

13 大学で現代ロシア文学を翻訳で読むというゼミをやっていたときのこと。ある日、一年生のまだ初々しい女子学生が寄ってきて、こう言った。「センセイ、この翻訳って、とってもこなれてますね。『ぼくはあの娘にぞっこんなんだ』だなんて。まるでロシア文学じゃないみたい」。それは確か、わが尊敬する先輩で、翻訳のうまいことで定評がある、浦雅春(注7)さんの訳だったと思う。そのときすぐにロシア語の原文を確認したわけではないので、単なる推量で言うのだが、それは人によっては「私は彼女を深く愛しているのである」などと四角四面に訳してもおかしくないような箇所だったのではないかと思う。

14 「ぼくはあの娘にぞっこんなんだ」と「私は彼女を深く愛しているのである」では、全然違う。話し言葉としてアッ(オ)トウ的に自然なのは前者であって(ただし「ぞっこん」などという言い方じたい、ちょっと古くさいが)、実際の会話で後者のような言い方をする人は日本人ではまずいないだろう。しかし、それでは後者が間違いかと言うと、もちろんそう決めつけるわけにもいかない。ある意味では後者のほうが原文の構造に忠実なだけに正しいとさえ言えるのかも知れないのだから。しかし、

C 正しいか、正しくないか、ということは、厳密に言えば、そもそも正確な翻訳とは何かという言語哲学の問題に行き着く

のであり、普通の読者はもちろん言語哲学について考えるために、翻訳小説を読むわけではない。多少不正確であっても、自然であればその方がいい、というのが一般的な受け止め方ではないか。

15 確かに不自然な訳文は損をする。例えば英語の小説を日本語に訳す場合、原文に英語として非標準的な、要するに変な表現が出てくれば、当然、同じくらい変な日本語に訳すのが「正確」な翻訳だということになるだろう。しかし、最近の「こなれた訳」に慣れた読者はたいていの場合、その変な日本語を訳者のせいにするから、訳者としては――うまい訳者であればあるほど――自分の腕前を疑われたくないばかりに、変な原文をいい日本語に直してしまう傾向がある。

（沼野充義（ぬまの みつよし）「翻訳をめぐる七つの非実践的な断章」による）

（注）
1 フランソワ・ラブレー――フランスの作家（一四九四―一五五三頃）。
2 ジェイムズ・ジョイス――アイルランドの作家（一八八二―一九四一）。
3 渡辺一夫――フランス文学者（一九〇一―一九七五）。特にラブレーの研究や翻訳に業績がある。
4 青山南――翻訳家、アメリカ文学者、文芸評論家（一九四二―　）。
5 『特殊言語』――ここでは当時の日本でこれらの言語の学習者が英語などに比べて少なかったことを表現している。
6 アンチョコ――教科書などの要点が簡潔にまとめられた、手軽な学習参考書。
7 浦雅春――ロシア文学者（一九四八―　）。

問1　傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 5 。

(ア)　タンネン　1

① イッタン休止する
② タンレンを積む
③ タンセイを込める
④ タンカで運ぶ
⑤ 計画がハタンする

(イ)　バクゼン　2

① バクガからビールが作られる
② サバクの景色を見る
③ ジュバクから解き放たれる
④ 観客がバクショウする
⑤ バクマツの歴史を学ぶ

(ウ)　ヒビく　3

① 物資をキョウキュウする
② ギャッキョウに耐える
③ 他国とキョウテイを結ぶ
④ エイキョウを受ける
⑤ ホドウキョウを渡る

(エ)　ヒンシュツ　4

① ヒンシツを管理する
② カイヒン公園で水遊びをする
③ ヒンパンに訪れる
④ ライヒンを迎える
⑤ 根拠がヒンジャクである

(オ)　アットウ　5

① 現実からトウヒする
② ジャズ音楽にケイトウする
③ トウトツな発言をする
④ シュウトウに準備する
⑤ 食事のトウブンを抑える

問2　傍線部A「翻訳家とはみなその意味では楽天家なのだ」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 難しい文学作品を数多く翻訳することによって、いつかは誰でも優れた翻訳家になれると信じているということ。
② どんな言葉で書かれた文学作品であっても、たいていのものはたやすく翻訳できると信じているということ。
③ どんなに翻訳が難しい文学作品でも、質を問わなければおおよそのところは翻訳できると信じているということ。
④ 言語や文化的背景がどれほど異なる文学作品でも、読者に何とか理解される翻訳が可能だと信じているということ。
⑤ 文学作品を原語で読んだとしても翻訳で読んだとしても、ほぼ同じ読書体験が可能だと信じているということ。

問3　傍線部B「翻訳というよりは、これはむしろ翻訳を回避する技術なのかも知れない」とあるが、筆者がそのように考える理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

① 慣用句のような翻訳しにくい表現に対しては、日本語のあいまいさを利用して意味をはっきり確定せずに訳すのが望ましい。だが、それでは原文の意味が伝わらないこともありえ、言葉の厳密な意味を伝達するという翻訳本来の役割から離れてしまうから。

② 慣用句のような翻訳しにくい表現でも、近似的に言い換えることによってこなれた翻訳が可能になる。だが、それは日本語としての自然さを重視するあまり、よりふさわしい訳文を探し求めることの困難に向き合わずに済ませることになるから。

③ 慣用句のような翻訳しにくい表現でも、直訳に注を付す方法や言い換えによって翻訳が可能になる。だが、それでは生硬な表現か近似的な言い方となってしまうため、文化の違いにかかわらず忠実に原文を再現するという翻訳の理想から離れたものになるから。

④ 慣用句のような翻訳しにくい表現に対して、不自然な表現だとしてもそのまま直訳的に翻訳しておくことで、それが翻訳不可能であることを伝える効果を生む。だが、一方でそのやり方は日本語として自然な翻訳を追求する努力から逃げることになるから。

⑤ 慣用句のような翻訳しにくい表現でも、文学作品の名訳や先輩翻訳者の成功例などを参考にすることで、こなれた翻訳が可能になることもある。だが、それでは適切な言い換え表現を自ら探求するという翻訳家の責務をまぬがれることになるから。

問4 傍線部C「正しいか、正しくないか、ということは、厳密に言えば、そもそも正確な翻訳とは何かという言語哲学の問題に行き着く」とあるが、ここから翻訳についての筆者のどのような考え方がうかがえるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

① 翻訳の正しさとは、原文の表現が他言語に置き換えられた時に、意味的にも構造的にも一対一で対応すべきという学問的な原則に関わるものである。そのため、このような翻訳家が理想とする厳密な翻訳と、一般の読者が理想とする自然な日本語らしい翻訳とは必然的に相反するものになるという考え方。

② 翻訳の正しさとは、原文の表現を他言語に置き換えるとはどういうことか、あるいはどうあるべきか、という原理的な問いに関わるものである。そのため、原文を自然な日本語に訳すべきか、原文の意味や構造に忠実に訳すべきかという翻訳家の向き合う問題は、容易に解決しがたいものになるという考え方。

③ 翻訳の正しさとは、標準的な原文も非標準的な原文もいかに自然な日本語に見せることができるかという翻訳家の技術の問題に関わるものである。そのため、結果としてなされた翻訳が言語哲学的な定義に則して正確であるかそうでないかは、あまり本質的な問題ではないという考え方。

④ 翻訳の正しさとは、結局は原文を近似的な言葉に置き換えることしかできないという翻訳の抱える限界に関わるものである。とはいえ、翻訳家は自然な日本語に訳すことと原文の意味や構造を崩すことなく訳すことを両立させ、時代を超えて通用する表現を目指すべきであるという考え方。

⑤ 翻訳の正しさとは、原文の意味を自然な日本語で効率的に伝えることと、原文の構造に則して忠実に伝達することという二方向の目的に対する翻訳家の選択に関わるものである。とはいえ、正確であるとはどういうことかは学問的に定義して決定していくべきであるという考え方。

問5 次に示すのは、本文を読んだ後に、五人の生徒が翻訳の仕事について話し合っている場面である。本文の趣旨と**異なる発言**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

① 生徒A――私たちは英語の授業などでI love you.は「私はあなたを愛する」と訳すのだと教わったけど、たしかに実際に日本語でそのように言う人はあまりいないよね。筆者は、翻訳先の言語の中に原文とぴったり対応する表現がなくてもそれらしく言い換えなくてはならないことを、翻訳の仕事の難しさだと考えているよ。

② 生徒B――そうだね、原文をそのまま訳すとどうしても違和感が出てしまう場合があるよね。でも、「あのう、花子さん、月がきれいですね」では、愛を告白するという意図が現代の私たちには伝わらないよ。やはり筆者がいうように、時代や文化の違いをなるべく意識させずに読者に理解させることが翻訳の仕事の基本なんだろうね。

③ 生徒C――筆者は子供の頃、外国の小説で「私はあなたを愛しているわ」と娘が父親に言う場面を読んで、翻訳の良し悪しを意識せずにいかにも外国人らしいと感心したけど、翻訳家としての経験を積んだ今ではなぜそんなに感心したのかと思っている。考えてみれば私たちは父親にそんな言い方をしないし、結局そこにも文化の差があるってことかな。

④ 生徒D――ロシア語からの翻訳の話でいえば「ぼくはあの娘にぞっこんなんだ」は少し古いけど、「私は彼女を深く愛しているのである」と比べたら会話としては自然だね。でも、筆者がいうように後者も正しくないとは言い切れない。こうしたことが起こるのも、ある言葉に対応する表現が別の言語文化の中に必ずあるとは限らないからだね。

⑤ 生徒E――でも、普通の読者はそこまで考えないから、自然な印象ならそれでいいってことになる。それで最近の翻訳では、ある言語文化の中で標準的でない表現がわざと用いられている文章まで、こなれた表現に訳す傾向がある。しかし、それではもとの表現がもつ独特のニュアンスが消えてしまう。そこにも筆者の考える翻訳の難しさがあるね。

問6 この文章の表現と構成について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) この文章の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 10 。

① 第 4 段落の「しかし、こう考えたらどうだろうか。」は、「こう」の指示内容がわからない段階で提案を投げかけ、読者の注意を引きつける働きをしている。

② 第 4 段落の「翻訳をするということ、いや翻訳を試みるということ」は、「翻訳」に対する筆者の捉え方を、「する」を打ち消して「試みる」に言い換えることによって強調して表している。

③ 第 12 段落の「ガイジン」は、現在では「外国人」という語のほうが一般的であるが、筆者はあえて子供時代の感覚を再現するために、カタカナ表記で使用している。

④ 第 12 段落の「あの時の少年は一体どんなことを考えただろうか」は、過去の自分が考えたことを回想し、当時を懐かしむ感情を表している。

(ii) この文章は、空白行によって四つの部分に分けられている。構成に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 11 。

① はじめの部分（1 ～ 4 段落）は、この文章のテーマである「翻訳」について、対極的な二つの考え方を示して問題提起し、支持する立場を一方に確定させている。

② 2番目の部分（5 ～ 9 段落）は、「翻訳不可能」な具体例を示して翻訳にまつわる問題点を明確にし、「言い換え」という別の手法を示して論を広げている。

③ 3番目の部分（10 ～ 12 段落）は、過去のエピソードを引用しながら、筆者が現在の職業に就くことになったきっかけを紹介し、論を補強している。

④ 4番目の部分（13 ～ 15 段落）は、翻訳の正しさについて検討し、筆者の考える正しさを示しながらも、結論を読者の判断に委ねている。

第2問 次の文章は、上林暁「花の精」の一節である。妻が病で入院し長期間不在の「私」の家には、三人の子と、夫に先立たれ途方に暮れている妹がいる。「私」にとって庭の月見草は心を慰めてくれる存在だったが、ある日、庭師が月見草を雑草だと思ってすべて抜いてしまった。「私」は空虚な気持ちで楽しめない日々を過ごしていた。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問い(**問1**～**6**)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 50)

私が朝晩庭に下りて、草花の世話をして、心を紛らわせているのを見ると、或日妹が言った。

「空地利用しようか！」

「なにを植えるんだ。」

「茄子やトマトなんかを。」

「前にも作ったことがあったが、ここは湿気が多いのと、隣の家の風呂の煙のために、駄目なんだ。糸瓜と茄子と紫蘇を植えて、一番好かったのは紫蘇だけだった。糸瓜は糸瓜水を一合ばかり採ったが、茄子は一つもならなかった。――とにかく、作るなら作って見よ。」

妹は市場へ行った序でに、茄子とチシャ菜の苗を買って来た。

「茄子は、一人に一本ずつで、十分間に合うそうだから。」

と言うわけで、茄子は五本買って来た。そんな言葉を言っているのを聞くと、いかにも百姓(注1)が妹の身に染みている感じがするのだった。妹は郷里では百姓をしていたのである。養蚕や田作りや葉煙草の栽培が、仕事であった。妹は(ア)お手のもので、鍬を持つと、庭の空いてる西隅に鍵の手に畝を切った。畝には、泥溝からあげた泥や、腐敗した落葉などを集めて来て埋めた。それが実に手際が好いのである。そして一定の間隔をおいて、五本の茄子を植えた。チシャ菜は、黄色い落葉を散らしたように、一面に植えた。二三日すると、今度はトマトを三本買ってきた。私は、草花を植えるために、縁先の陽あたりの好いところは全部占領していたけれど、**A** 自分だけ好いところを占領するのは気がひけたので、そこの一部を割いて、トマトを植えさせた。

小さな菜園だが、作りはじめると、妹は急に生き生きとして来た。故郷で身についた親しい生活を、小規模ながらも味わえるのが、楽しいのであろう。それからまた、私が花の世話をするのと同じく、菜園の世話をしていれば、途方にくれた思いも、一日と時忘れることが出来、心が慰まるからにちがいない。妹も朝晩バケツに水を汲み、柄杓で茄子やチシャ菜の根にかけた。米の研ぎ汁は、養分の多いことに思いついて、擬宝珠(注2)にまで撒くことになったのである。小さな庭のなかに、兄が花畠をつくり、妹が菜園をつくるのも、皆それぞれ、遣り場のない思いを、慰め、紛らそうがためにほかならないのだ。とすれば、擬宝珠と並んで、花畠のなかの双璧であった月見草を喪った私の失望落胆は察してもらえるにちがいない。

然るに、その月見草を喪ってから十日と経たぬうちに、私の家の庭には、ふたたび新しい月見草が還って来て、私の精神の秩序も回復されることとなるのである。

それは、六月の中旬。友人のO君が来たとき、どっか山の見えるところへ行きたいと私が言うと、多摩川べりの是政というところへ行けば、すぐ川のむこうへ山が迫っているという。O君は是政へ鮠を釣りに行くから、一緒に行ってもいいということだった。山を見たいとは言ったものの、それだけでは腰をあげる気のしなかった私は、そのあとでまた、月見草のことをO君に訴えたのである。すると、是政へ行けば、月見草なんか川原に一杯咲いているという。私は忽ち腰をあげる気持になった。O君が釣をしている間じゅう、私は川原で寝そべったり、山を見たりして遊び、かえりには月見草を引いて来ることに、(イ)肚を決めたのである。

その日の午後、私達は省線武蔵境駅からガソリン(注4)・カアに乗った。是政行は二時間おきにしか出ないので、仕方なく北多磨行に乗った。そこから多摩川まで歩くのである。私は古洋服に、去年の麦藁帽子をかぶり、ステッキをついていた。O君は色眼鏡をかけ、水に入る用意にズックの靴をはき、レイン・コオトを纏って、普段のO君とまるでちがい、天っ晴れ釣師の風態であった。ガソリン・カアは動揺激しく、草に埋れたレエルを手繰り寄せるように走って行った。風が起って、両側の土手の青草が、

サアサアと音を立てながら靡くのが聞えた。私達は運転手の横、最前頭部の腰掛に坐っていた。

「富士山が近く見えるよ。」とO君が指さすのを見ると、成る程雪がよく見える。

多磨墓地前で停車。あたりは、石塔を刻む槌の音ばかりである。次が北多磨。そこで降りて、私達は線路伝いに、多摩川へ向って行った。麦が熟れ、苗代の苗が伸びていた。線路は時々溝や小川の上を跨っていて、私達は枕木伝いに渡らねばならなかった。

「もう、ここらから月見草が、いっぱいだよ。」とO君が、釣竿で指すのを見ると、線路のふちに、月見草が一杯並んでいる。昨夜の花は萎え凋み、葉は暑さのためにうなだれている。一体に痩せた感じで、葉色も悪く、うちにあったのが盛んであったさまを思い、私は少し物足りなかった。しかし私は安心した。そこいらいっぱいの月見草を見ると、もう大丈夫だという感じだった。

「月見草には二種類あるんだね。匂いのするのと、しないのと。」

そう言えば、私のうちの庭にあったのは、葉が密生していて、匂いのしないのであった。

線路に別れると、除虫菊の咲いた畠の裾を歩いたり、桑の切株のならんだ砂畠を通ったりして、荒地野菊の間を分け、私達は多摩川の土手にあがって行った。眼のまえは、多摩川の広い川原である。旱天つづきで、川筋は細々と流れている。川のむこうは直ぐ山で、緑が眼に沁みた。南武電車の鉄橋を、二輌連結の電車が渡って行った。

川原に降りると、また月見草がいっぱいだった。

「かえりには、もう咲いてるだろうな。」

「咲いてるとも。いいのを見つくろって、引いてゆくといいよ。」

O君は瀬の中へ入って、毛針を流しはじめた。私は上衣を脱いで、川原に坐った。帽子が風に吹き飛ばされるので、脱いで、石を載せておいた。O君が流れを下ると、それにつれて、私は魚籠を提げて、川原を下った。時々靴をぬいで、水を渉らねばならなかった。川原に坐って流れを見ていると、眼先が揺れはじめ、眼を上げて見ると、山も揺れるのであった。緑の濃い夏山の

たたずまいは、ふと私に故郷の山を思い出させた。山を見るのも何年ぶりであろう。時々千鳥が啼いた。魚がかかると、O君は腰を一寸うしろに引き、釣針を上げた。すると私は魚籠を差し出した。O君が中流に出るため魚籠を腰につけると、私は閑になったので、砂利を採ったあとの凹みに入って寝ころがった。人差指ほどの鮠を八匹、それがO君の獲物であった。

夕翳が出て、川風が冷えて来た。

「もうあと十分やるから、君は月見草を引いててくれない？」

私はO君を残し、川原で手頃な月見草を物色した。匂いのあるのを二本と、匂いのないのを二本、新聞紙にくるんだ。蕾はまだ綻びていない。振りかえってみると、O君はまだ寒そうな恰好をして瀬の中に立っている。川原の路を、夜釣の人が自転車を飛ばしてゆく。

私は仮橋を渡り、番小屋の前に立って橋賃を払いながら、橋番(注5)の老人と話をしていた。私の家が杉並天沼だというと、天沼に親戚があると言った。

そこへ、O君が月見草の大きな株を手いっぱいに持って、あがって来た。**B**それは、なんだかよろこばしい図であった。それを見ると、私も思い切って大きなやつを引けばよかったと思った。

「あれから、どうだった？」

「駄目々々。」

「今日は曇っているから、魚があがって来ないんだよ。」と橋番の老人が言った。

「これ、一緒に包んでくれない？」

私は、O君の月見草を、自分のと一緒に新聞紙に包み、O君が首に巻いていた手拭で、それを結えた。そして小脇に抱えた。

「みんな、それを引いてくんだがね、なかなかつかないんだよ。種を播いとく方がいいよ。」とまた橋番の老人が言った。そう言いながらも、老人の眼は絶えず、橋行く人に注がれている。

是政の駅は、川原から近く、寂しい野の駅だった。古びた建物には、駅員のいる室だけに電燈が点いていて、待合室は暗かっ

た。私達は、そこの、暗いベンチに腰をおろした。疲れていた。寒かった。おなかが空いていた。カアが来るまでにはまだ一時間ある。七時五十五分が終発なのだ。

「寒いことはない？」

「いや。」そう言ったが、水からあがったばかりのO君は脛まで濡れ、寒そうに腕組みしていた。

二時間に一度しか汽動車の入って来ない閑散な駅なので、駅員はゆっくりと新聞を読んでいた。その新聞には、ドイツ軍の巴里肉薄が載っているはずであった。駅員は七時になると徐ろに立ち上って待合室の電燈をつけた。

私はベンチを離れ、待合室の入口に立って、村の方を見ていた。村は暗く、寂しい。畑のむこう、林を背にして、サナトリウム(注6)の建物が見えた。私が待合室の入口に立った時には、どの部屋にもまだ灯がついていなかったので、暗い窓をもった建物は、窩をもった骸骨のように見え、人の棲まぬ家かと思われた。そのうちにポツリ、ポツリと、部屋々々に灯がつきはじめ、建物が生きて来た。それを見ていると、C突然私は病院にいる妻のことを思い出した。今日家を出てから、妻のことを思い出すのは初めてである。妻は今ごろどうしているだろうか。もう疾っくに晩飯をすませ、独り窓のそばに坐っているだろうか。廊下にでも出て立っているだろうか。それとも、もう電燈を消して、寝床に入っているだろうか。

寂しさがこみあげて来た。私はO君を一人残して、サナトリウムの方へ歩いて行った。恰も自分の妻もこのサナトリウムに住んでいるかの如き気持で、私はその建物に向って突き進んで行った。部屋々々には、もう明るく灯がともり、蚊帳の影も見える。炊事室らしく、裏手の方からは皿や茶碗を洗う音が聞えた。二階の娯楽室らしい広間には、岐阜提燈に灯が入り、水色の光のなかを、あちこち動いている患者の姿も見えた。私は、それらの光景を、ゆっくりと眼や耳に留めながら、サナトリウムの前を通り過ぎた。通りすぎながら、またしても、妻が直ぐそこの病室にいるかの如き気持になって、妻よ、安らかなれ、とよそながら、胸のなかで、物言うのであった。私は感傷的で、涙が溢れそうであった。

ほとんど涙を湛えたような気持で、サナトリウムを後に、乾いた砂路をポクポク歩いていると、ふと私は吸いつけられたように足を停めた。眼の前一面に、月見草の群落なのである。涙など一遍に引っ込んでしまった。薄闇の中、砂原の上に、今開いた

ばかりの月見草が、私を迎えるように頭を並べて咲き揃っているのである。右にも左にも、群れ咲いている。遠いのは、闇の中に姿が薄れていて、そのため却って、その先一面どこまでも咲きつづいているような感じを与えるのであった。私は暫く佇んで(ウ)目を見張っていたが、いつまで見ていても果てしがない。O君のことも思い出したので、急ぎ足にそこを立ち去った。

七時五十五分、最終のガソリン・カアで、私たちは是政の寒駅を立った。乗客は、若い娘が一人、やはり釣がえりの若者が二人、それにO君と私とだった。自転車も何も一緒に積み込まれた。月見草の束は網棚の上に載せ、私達はまた、運転手の横の腰掛に掛けた。線路の中で咲いた月見草を摘んでいた女車掌が車内に乗り込むと、さっき新聞を読んでいた駅員が駅長の赤い帽子を冠り、ホームに出て来て、手を挙げ、ベルを鳴らした。

ガソリン・カアはまた激しく揺れた。私は最前頭部にあって、吹き入る夜風を浴びながら、ヘッドライトの照し出す線路の前方を見詰めていた。是政の駅からして、月見草の駅かと思うほど、構内まで月見草が入り込んでいたが、驚いたことには、今ガソリン・カアが走ってゆく前方は、すべて一面、月見草の原なのである。右からも左からも、前方からも、三方から月見草の花が顔を出したかと思うと、火に入る虫のように、ヘッドライトの光に吸われて、後へ消えてゆくのである。それがあとからあとからひっきりなしにつづくのだ。私は息を呑んだ。**D**それはまるで花の天国のようであった。毎夜毎夜、この花のなかを運転しながら、運転手は何を考えるだろうか？　うっかり気を取られていると、花のなかへ脱線し兼ねないだろう。

花の幻が消えてしまうと、ガソリン・カアは闇の野原を走って、武蔵境の駅に着いた。是政からかえると、明るく、花やかで、眩しいほどだった。網棚の上から月見草の束を取り下ろそうとすると、是政を出るときには、まだ蕾を閉じていた花々が、早やぽっかりと開いていた。取り下ろす拍子に、ぷんとかぐわしい香りがした。私は開いた花を大事にして、月見草の束を小脇に抱え、陸橋を渡った。

（注）

1　百姓――ここでは農作業をすること。

2　擬宝珠――夏に白色、淡紫色などの花を咲かせるユリ科の植物の名称。

3　省線――この文章が発表された一九四〇年当時、鉄道省が管理していた大都市周辺の鉄道路線。

4　ガソリン・カア――ガソリンエンジンで走行する鉄道車両。

5　橋番――橋の通行の取り締まりや清掃などの仕事をする人。

6　サナトリウム――郊外や高原で新鮮な空気や日光などを利用して長期に療養するための施設。

問1　傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14 。

(ア)　お手のもので 12

① 見通しをつけていて
② 腕がよくて
③ 得意としていて
④ ぬかりがなくて
⑤ 容易にできそうで

(イ)　肚(はら)を決めた 13

① 気持ちを固めた
② 段取りを整えた
③ 勇気を出した
④ 覚悟を示した
⑤ 気力をふりしぼった

(ウ)　目を見張っていた 14

① 間違いではないかと見つめていた
② 感動して目を見開いていた
③ 動揺しつつも見入っていた
④ 集中して目を凝らしていた
⑤ まわりを見わたしていた

問2　傍線部A「自分だけ好いところを占領するのは気がひけたので、そこの一部を割いて、トマトを植えさせた」とあるが、この場面からわかる、妹に対する「私」の気持ちや向き合い方はどのようなものであるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15 。

① 自分だけが庭の日なたの部分を使い花を育てていることに後ろめたい気持ちになり、これからは一緒にたくさんの野菜を育てることで落ち込んでいた妹を励ましそうとしている。

② 活力を取り戻して庭に野菜畑を作るために次々と行動する妹に接し、気後れしていたが、家族である妹との関わりは失った月見草に代わる新しい慰めになるのではないかと思い始めている。

③ 野菜を植える手慣れた様子に妹の回復の兆しを感じ、慰めを求めているのは自分だけではないのだから園芸に適した場所を独占するのは悪いと思い、妹にもそこを使わせる気遣いをしている。

④ 自分が庭を一人占めしていることを妹から指摘されたような気持ちになり、再出発した妹に対する居心地の悪さを解消するために、栽培に好都合な場所を妹と共用しようとしている。

⑤ 何もない土地に畝を作り、落ち葉を埋める妹の姿に将来の希望を見出したような思いになり、前向きになっている妹の気持ちを傷つけないように、その望みをできるだけ受け入れようとしている。

問3　傍線部B「それは、なんだかよろこばしい図であった。」とあるが、そう感じたのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16 。

① いつの間にか月見草に関心をもっていたO君と、大きな月見草の株とが一緒になった光景は目新しく、月見草を失った自分の憂いが解消してしまうような爽快なものだったから。

② 月見草を傷つけまいと少ししか月見草をとらなかった自分と対照的に、たくさんの月見草の株をとってきたO君の姿は、落胆する自分の気持ちを慰めてくれるかのような力強いものだったから。

③ 釣りをしていたはずのO君が、短い時間で手際よくたくさんの月見草の株を手にして戻ってきた光景は驚くべきもので、その行動の大胆さは自分を鼓舞するような痛快なものだったから。

④ 匂いがするかしないかを考えて月見草をとってきた自分とは異なり、その違いを考慮せずに無造作に持ってきたO君の姿は、いかにも月見草に興味がない人の行為のようなほほえましいものだったから。

⑤ 月見草に関心がなく、釣りに夢中だと思っていたO君が月見草の大きな株を手にしていた光景は意外で、月見草への自分の思いをO君が理解してくれていたと思わせるようなうれしいものだったから。

問4 傍線部C「突然私は病院にいる妻のことを思い出した」とあるが、この前後の「私」の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17 。

① 暗く寂しい村の中に建つサナトリウムの建物を見ているうちに、忘れようと努めていた妻の不在がふと思い出されて絶望的な思いになった。しかし、今の自分にできることは気持ちだけでも妻に寄り添うようにすることだと思い直し、妻の病状をひたすら案ずるようになっている。

② サナトリウムの建物に灯がともり始めたのを見て、離れた地で入院中の妻のことが急に頭に浮かび、その不在を感じた。妻がすぐそこにいるような思いにかられて建物に近づき、人々の生活の気配を感じるうちに妻のことを改めて意識して、その平穏を願い胸がいっぱいになっている。

③ 生気のなかったサナトリウムの建物が次第に活気づいてきたと思っているうちに、他の施設に入院している妻もまた健やかに生活しているような錯覚にとらわれ出した。しかし、あまり思わしくない妻の病状を考え、現実との落差に対する失望感から泣き出しそうな思いになっている。

④ サナトリウムの建物の内部が生き生きとしてきたことがきっかけとなって、入院している妻が今どのように過ごしているかを想像し始めた。朝から月見草をめぐる自分の心の空虚さにこだわり、妻の病を忘れていたことに罪悪感を覚え、妻への申し訳なさで頭がいっぱいになっている。

⑤ サナトリウムの建物が骸骨のように見えたことで、療養中の妻のことをにわかに意識するようになった。その感情が是政駅で感じた寒さや疲労と結びついて、妻がいつまでも退院できないのではないかという不安がふくらみ、妻の回復を祈るしかないと感じている。

問5　傍線部D「それはまるで花の天国のようであった。」とあるが、ここに至るまでの月見草に関わる「私」の心の動きはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18 。

① 是政の駅に戻る途中で目にした、今咲いたばかりの月見草の群れは、どこまでも果てしなく広がるようで、自分の感傷を吹き飛ばすほどのものだった。さらに武蔵境へ向かう車中で見た、三方から光の中に現れては闇に消えていく一面の月見草の花によって、憂いや心労に満ちた日常から自分が解放されるように感じた。

② 月見草を求めて出かけたが、多摩川へ向かう途中の月見草が痩せていて生気のないことや橋番の悲観的な言葉などによって、持ち帰っても根付かないかもしれないと心配になった。しかし、是政の駅を出て目にした、ヘッドライトに照らされた月見草は、自分の心を癒やしてくれ、庭に月見草が復活するという確信を得た。

③ サナトリウムを見たときは妻を思って涙ぐんだが、一面に広がる月見草の群落が自分を迎えてくれるように感じられ、現実の寂しさを忘れることができた。さらに帰りの車中で目にした月見草の原は、この世のものとも思えない世界に入り込んだような安らかさを感じさせ、妻の病も回復に向かうだろうという希望をもった。

④ 月見草を手に入れた後に乗ったガソリン・カアの前方には月見草の原が広がり、驚いて息を呑むばかりだった。サナトリウムの暗い窓を思わせる闇から、次々に現れては消える月見草に死後の世界のイメージを感じ取り、毎夜このような光景を見ている運転手は死に魅入られてしまうのではないかと想像した。

⑤ O君のおかげで多摩川へ行く途中にたくさんの月見草を見ることができたうえに、匂いのする新しい月見草まで手に入った。気がかりなのは妻のことだったが、是政から武蔵境に行く途中に見た、闇の中から現れ光の果てに消えていく月見草の幻想的な光景は、自分と妻の将来に明るい幸福を予感させてくれた。

問6　この文章の表現に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 19 ・ 20 。

① 2行目「空地利用しようか！」では「！」を使用し、また4行目「茄子やトマトなんかを。」では述語を省略することで、菜園を始める際の会話部分をテンポよく描き、妹の快活な性格を表現している。

② 25行目「それは、六月の中旬。」、37行目「多磨墓地前で停車。」、「次が北多磨。」などの体言止めの繰り返しによって、O君と一緒に是政に行く旅が、「私」にとって印象深い記憶であったことを強調している。

③ 35行目「サアサアと音を立てながら」、83行目「ポツリ、ポツリと、部屋々々に灯がつきはじめ」、93行目「ポクポク歩いていると」など、カタカナ表記の擬音語・擬態語を使うことで、それぞれの場面の緊迫感を高めている。

④ 44・45行目や、60行目における月見草の匂いの有無に関する叙述は、110行目の、「私」が網棚から月見草を下ろすときに「ぷんとかぐわしい香りがした」という嗅覚体験を際立たせる表現となっている。

⑤ 75行目「疲れていた。寒かった。おなかが空いていた。」という部分は、短い文を畳みかけるように繰り返すことで、「私」の状況が次第に悪化していく過程を強調する表現になっている。

⑥ 82行目「建物は、窩をもった骸骨のように見え」、95行目「私を迎えるように頭を並べて咲き揃っている」のように、比喩を用いることによって、「私」の心理を間接的に表現している。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第3問

次の文章は『玉水物語』の一節である。高柳の宰相には十四、五歳になる美しい姫君がいた。本文は、花園に遊ぶ姫君とその乳母子の月冴を一匹の狐が目にしたところから始まる。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点　50）

折節この花園に狐一つ侍りしが、姫君を見奉り、「あな美しの御姿や。せめて時々もかかる御有様を、よそにても見奉らばや」と思ひて、木陰に立ち隠れて、(ア)しづ心なく思ひ奉りけるこそあさましけれ。姫君帰らせ給ひぬれば、狐も、かくてあるべきことならずと思ひて、我が塚へぞ帰りける。つくづくと座禅して身の有様を観ずるに、「我、前の世いかなる罪の報いにて、かかるけだものと生まれけむ。美しき人を見そめ奉りて、およばぬ恋路に身をやつし、**A**いたづらに消え失せなむこそうらめしけれ」とうち案じ、さめざめとうち泣きて臥し思ひけるほどに、よきに化けてこの姫君に逢ひ奉らばやと思ひけるが、またうち返し思ふやう、「我、姫君に逢ひ奉らば、必ず御身いたづらになり給ひぬべし。父母の御嘆きといひ、世にたぐひなき御有様なるを、いたづらになし奉らむこと御いたはしく」、とやかくやと思ひ乱れて明かし暮らしけるほどに、餌食をも服せねば、身も疲れてぞ臥し暮らしける。もしや見 **a** 奉るとかの花園によろぼひ出づれば、人に見られ、あるは飛礫を負ひ、あるは神頭（注1）を射かけられ、いとど心を焦がしけるこそあはれなれ。

なかなかに露霜とも消えやらぬ命、もの憂く思ひけるが、(イ)いかにして御そば近く参りて朝夕見奉り心を慰めばやと思ひめぐらして、ある在家（注2）のもとに、男ばかりあまたありて女子を持たで、多き子どもの中にひとり女ならましかばと朝夕嘆くをたよりにて、年十四、五の容貌あざやかなる女に化けて、かの家に行き、「我は西の京の辺にありし者なり。無縁の身となり、頼む方なきままに、足にまかせてこれまで迷ひ出でぬれど、行くべき方もおぼえねば頼み奉らむ」と言ふ。主の女房うち見て、「いたはしや。徒人ならぬ御姿にて、いかにしてこれまで迷ひ出でけむ。同じくは我を親と思ひ給へ。男はあまた候へども女子を持たねば、朝夕欲しきに」と言ふ。「さやうのことこそ嬉しけれ。いづこを指して行くべき方も侍らず」と言へば、なのめならず喜びていとほしみ置き奉る。いかにしてさもあらむ人に見せ奉らばやといとなみける。されど、**B**この娘、つやつやうちとくる気色もなく、折々はうち泣きなどし給ふゆゑ、「もし見給ふ君など **b** 候はば、我に隠さず語り給へ」と慰めければ、「ゆめゆめさや

うのことは侍らず。憂き身のめざましくおぼえてかく結ぼれたるさまなれば、人に見ゆることなどは思ひもよらず。ただ美しからむ姫君などの御そばに侍りて、御宮仕へ申したく c 侍るなり」と言へば、「よき所へありつけ奉らばやとこそ常に申せども、さも思し召さば、ともかくも御心には違ひ候ふまじ。高柳殿の姫君こそ優にやさしくおはしませば、わらはが妹、この御所に御非上にて候へば、聞きてこそ申さめ。何事も心やすく、思されむことは語り給へ。違へ奉らじ」と言へば、いと嬉しと思ひたり。

かく語らふところに、かの者来たりければ、この由を語れば、「そのやうをこそ申さめ」とて、立ち帰り御乳母にうかがへば、「さらばただやがて参らせよ」とのたまふ。喜びてひきつくろひ参りぬ。見様、容貌、美しかりければ、姫君も喜ばせ給ひて、名をば玉水の前とつけ給ふ。何かにつけても優にやさしき風情して、姫君の御遊び、御そばに朝夕なれ仕うまつり、御手水参らせ供御 d 参らせ、月冴と同じく御衣の下に臥し、立ち去ることなく候ひける。御庭に犬など参りければ、この人、顔の色違ひ、身の毛一つ立ちになるやうにて、物も食ひ得ず、けしからぬ風情なれば、御心苦しく思されて、御所中に犬を置かせ給はず。「あまりけしからぬ物怖ぢかな」「(ウ)この人の御おぼえのほどの御うらやましさよ」など、かたはらにはねたむ人もあるべし。

かくて過ぎ行くほどに、五月半ばの頃、ことさら月も隈なき夜、姫君、御簾の際近くゐざらせ給ひて、うちながめ給ひけるに、ほととぎすおとづれて過ぎければ、

ほととぎす雲居のよそに音をぞ鳴く

と仰せければ、玉水とりあへず、

深き思ひのたぐひなるらむ

やがて「わが心の内」とぐぢぐぢ申しければ、「何事にかあらむ、心の中こそゆかしけれ。恋とやらむか、また人に恨むる心などか。あやしくこそ」とて、

五月雨のほどは雲居のほととぎす
誰がおもひねの色をしるらむ

（注）

1　神頭――鏃（やじり）の一種。

2　在家――ここでは民家のこと。

3　結ぼれたるさま――気分がふさいで憂鬱なさま。

4　非上――貴人の家などで働く女性。

5　供御――飲食物。

6　ぐぢぐぢ――ぼそぼそと。口ごもるように言うさま。

問1　傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 21 ～ 23 。

(ア)　しづ心なく思ひ奉りけるこそあさましけれ　21

① 身のほどを知らず恋い焦がれたのは嘆かわしいことだ
② 気持ちが静まらずお慕いしたのは驚きあきれたことだ
③ 見境なく恋心をお伝えになったのはあさはかなことだ
④ 冷静な心を欠いたまま判断なさったのは情けないことだ
⑤ 理性を失い好意をお寄せ申し上げるのは恐ろしいことだ

(イ)　いかにして　22

① 思い直して
② どのようにして
③ どういうわけで
④ なんとかして
⑤ いずれにしても

(ウ)　この人の御おぼえのほど　23

① この人のご自覚の強さ
② この人と姫君のお似合いの様子
③ この人に対するご評判の高さ
④ この人のご記憶の確かさ
⑤ この人の受けるご寵愛（ちょうあい）の深さ

問2　波線部a～dの敬語は、それぞれ誰に対する敬意を示しているか。その組合せとして正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24 。

	a	b	c	d
①	狐	見給ふ君	娘	玉水の前
②	狐	娘	主の女房	姫君
③	姫君	見給ふ君	娘	姫君
④	姫君	娘	主の女房	姫君
⑤	姫君	娘	娘	玉水の前

問3　傍線部A「いたづらに消え失せなむこそうらめしけれ」とあるが、このときの狐の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25 。

① 人間に恋をしたことにより、罪の報いを受けて死んでしまうことを無念に思う気持ち。
② 姫君に何度も近づいたことで疎まれ、はやく消えてしまいたいと悲しく思う気持ち。
③ 姫君に思いを伝えないまま、なんとなく姿を消してしまうのも悔しいと思う気持ち。
④ 人間に化けるという悪行を犯して、のたれ死にしてしまうことを情けなく思う気持ち。
⑤ かなわぬ恋に身も心も疲れきって、むなしく死んでしまうことを残念に思う気持ち。

問4　傍線部B「この娘、つやつやうちとくる気色もなく、折々はうち泣きなどし給ふ」とあるが、娘はどのような思いからこのような態度を示したのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26 。

① 思い悩んでいるふりをして、意中の人との縁談を提案してくれるように養母を誘導したいという思惑。
② 自分の娘の可愛らしい姿を人前で見せびらかしたいと思っている養母に対して、逆らえないという不満。
③ 縁談を喜ばず沈んだ様子を見せれば、自分の願いを養母に伝えるきっかけが得られるだろうという期待。
④ 養女としての立場ゆえの疎外感や他に頼る者のいない心細さを、はっきりと養母に伝えたいという願望。
⑤ 養母をだましていることからくる罪悪感によって、養母の善意を素直に受け入れられないという苦悩。

問5　狐が娘に化けた理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27 。

① 男に化けて姫君と結ばれれば姫君の身を不幸にし、両親を悲しませることにもなると思い、せめて宮仕えのできそうな美しい女に姿を変えてそばにいられるようにしようと考えたから。

② 男子しかいない家に美しい娘の姿で引き取ってもらえれば、養い親から大事に育てられるし、そのうえ縁談でも持ち上がれば、高柳家との縁もできるのではないかと考えたから。

③ 姫君に気に入ってもらえるようにするには、男の姿よりも天性の優美さをいかした女の姿の方がよく、そばに仕えられるようになってから思いの丈を打ち明けようと考えたから。

④ 人間に化けて姫君に近づけば愛(いと)しい人をだますことになるが、望まない縁談を迫られている姫君を守るためには、男の姿より、近くで仕えられる女の姿の方が都合がよいと考えたから。

⑤ 高柳家の姫君が自分と年近い侍女を探しているという噂(うわさ)を聞きつけ、つてを作るために、同情をひきやすい、年若く薄幸な女の姿で在家の主に引き取ってもらおうと考えたから。

問6　この文章では、姫君との関係において、玉水のどのような姿が描かれているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 28 。

① 犬をおそれる玉水のために邸内に犬を置かせないようにするなど、月冴が嫉妬を覚えるほど、姫君は玉水を厚遇した。最愛の姫君と歌を詠み合うことに熱中するあまりに、周囲の不満に気づけない玉水の姿が描かれている。

② 玉水の秘めた思いを察した姫君は、それが自身への恋心であるとは思いもよらず、胸中を知りたいと戯れる。打ち明けられない思いを姫君本人から問われてしまうという、せつない状況に置かれた玉水の姿が描かれている。

③ 「ほととぎす雲居のよそに音をぞ鳴く」の句から、玉水は姫君が密(ひそ)かに心を寄せる殿上人の存在を感じ取ってしまう。自らの恋心を隠しながら下の句を付け、姫君の恋を応援しようとする、けなげな玉水の姿が描かれている。

④ 思わず口をついて出た「わが心の内」という玉水の言葉に反応し、姫君はその内実をしつこく問い詰める。その姫君に対し、私の思いをわかってもらえるはずもないと、冷たい応対をせざるを得ない玉水の姿が描かれている。

⑤ 念願かなって姫君の寵愛を受けられるようになった玉水だが、そのことで周囲から嫉妬され、涙にくれるような状況にある。苦しい立場を理解してくれない姫君に対して、胸の内を歌で訴えている玉水の姿が描かれている。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第4問 次の文章は、唐代の詩人杜甫が、叔母の死を悼んだ文章である。杜甫は幼少期に、この叔母に育ててもらっていた。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点　50）

嗚呼哀哉。有兄子曰甫、制服於斯、紀徳於斯、刻石於斯。

A

或曰、「豈孝童之猶子与、奚孝義之勤若此。」甫泣而対曰、「非

B

敢当是也、亦為報也。甫昔臥病於我諸姑、姑之子又病、問

C

女巫、巫曰、『処楹之東南隅者吉』。姑遂易子之地以安我。我

D

用是存、而姑之子卒。後乃知之於走使。甫嘗有説於人、客

将出涕、感者久之、相与定謚曰義。」

君子以為魯義姑者、遇暴客於郊、抱其所携、棄其所抱、

以割私愛。県君有焉。

E

是以挙茲一隅、昭彼百行。銘而不韻、蓋情至無文。其詞

F

曰「嗚呼、有唐(注14)ノ義姑、京(注15)兆杜氏之墓。」

（『杜詩詳註』による）

（注）

1 甫――杜甫自身のこと。

2 制二服於斯一――喪に服する。

3 刻二石於斯一――墓誌（死者の経歴などを記した文章）を石に刻む。

4 豈孝童之猶子与――あの孝童さんの甥ですよね、の意。杜甫の叔父杜幷は親孝行として有名で、「孝童」と呼ばれていた。「猶子」は甥。

5 諸姑――叔母。後に出てくる「姑」も同じ。

6 女巫――女性の祈禱師。後に出てくる「巫」も同じ。

7 走使――使用人。

8 諡――生前の事績を評価して与える呼び名。

9 魯義姑――漢の劉向の『列女伝』に登場する魯の国の女性。自分の子を抱き、兄の子の手を引いていた際に、「暴客」（注10）と遭遇した。

10 暴客――暴徒。ここでは魯の国に攻めてきた斉の国の軍隊を指す。

11 県君――婦人の称号。ここでは叔母を指す。

12 百行――あらゆる行い。

13 銘而不レ韻――銘文を作るが韻は踏まない。「銘」は銘文を指し、死者への哀悼を述べたもの。通常は修辞として韻を踏む。

14 有唐――唐王朝を指す。

15 京兆――唐の都である長安（いまの陝西省西安市）を指す。

問1　二重傍線部(ア)「対」・(イ)「乃」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 29 ・ 30 。

(ア) 対 29

① こらえて
② そむいて
③ こたえて
④ そろって
⑤ さけんで

(イ) 乃 30

① すぐに
② いつも
③ ことごとく
④ やっと
⑤ くわしく

問2　傍線部A「奚孝義之勤若レ此」から読み取れる杜甫の状況を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 31 。

① 杜甫は若いにもかかわらず、叔母に孝行を尽くしている。
② 杜甫は実の母でもない叔母に対し、孝行を尽くしている。
③ 若い杜甫は仕事が忙しく、叔母に対して孝行を尽くせていない。
④ 杜甫は実の母でもない叔母には、それほど孝行を尽くしていない。
⑤ 杜甫は正義感が強いので、困窮した叔母に孝行を尽くしている。

問3　傍線部B「非二敢 当一レ是 也」は、「とんでもないことです」という恐れ多い気持ちを示す表現である。なぜ杜甫がこのように語るのか、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 32 。

① 杜甫は孝行を尽くしたという自負は持っていたが、より謙虚でありたいと願ったから。
② 杜甫は他者に優しくありたいと望んではいたが、まだその段階にまで達していないと意識しているから。
③ 杜甫は生前の叔母の世話をしていたが、今は喪に服することでしか彼女に恩返しできないから。
④ 杜甫は叔父だけでなく叔母も亡くしてしまい、孝行する機会を永遠に失ってしまったから。
⑤ 杜甫は自分を養育してくれた叔母に感謝し、その善意に応えているだけだと思っているから。

問4　傍線部C「処 楹 之 東 南 隅 者 吉」の書き下し文とその解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33 。

① [書き下し文]楹の東南隅を処する者は吉なり
[解釈]東南側の柱を処分すると、運気が良くなります

② [書き下し文]楹に処りて東南隅に之く者は吉なり
[解釈]柱から東南側へ向かってゆくと、運気が良くなります

③ [書き下し文]楹の東南隅に処る者は吉なり
[解釈]柱の東南側にいると、運気が良くなります

④ [書き下し文]楹を之の東南隅に処する者は吉なり
[解釈]柱を家の東南側に立てると、運気が良くなります

⑤ [書き下し文]楹を処し東南隅に之く者は吉なり
[解釈]柱に手を加えて東南側へ移すと、運気が良くなります

問5　傍線部D「我 用」是 存、而 姑 之 子 卒」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34 。

① 杜甫は女巫のお祓(はら)いを受けたことで元気を取り戻したが、叔母の子は命を落とした。
② 杜甫は叔母がすぐに寝場所を替えてくれたので命拾いしたが、叔母の子は重病となった。
③ 杜甫は叔母のおかげで気持ちが落ち着いたので助かり、叔母の子の病気も治った。
④ 杜甫は叔母が優しく看病してくれたので病気が治り、叔母の子も回復した。
⑤ 杜甫は叔母が寝場所を移してくれたので生きているが、叔母の子は犠牲になった。

問6　傍線部E「県　君　有レ焉」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

① 叔母は魯の義姑のように、一族の跡継ぎを重んじる考え方に反発していたので、義と呼べるということ。
② 叔母は魯の義姑のように、私情を断ち切って甥の杜甫を救ったので、義と呼べるということ。
③ 叔母は魯の義姑のように、いつも甥の杜甫を実子と同様に愛したので、義と呼べるということ。
④ 叔母は魯の義姑のように、愛する実子を失ったことを甥の杜甫に黙っていたので、義と呼べるということ。
⑤ 叔母は魯の義姑のように、暴徒をも恐れぬ気概を持っていたので、義と呼べるということ。

問7　傍線部F「銘　而　不レ韻、蓋　情　至　無レ文」についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36 。

① 杜甫は慎み深かった叔母のために、韻を踏まない銘を記した。それは実子以上に自分をかわいがってくれた叔母への感謝を思いのままに述べては、人知れず善行を積んでいた叔母の心情に背くと考えたためである。

② 杜甫は毅然（きぜん）としていた叔母のために、韻を踏まない銘を記した。それは取り乱しがちな自分の感情を覆い隠し、飾り気のない文に仕立て上げてこそ、叔母の人柄を表現するのにふさわしいと思ったためである。

③ 杜甫は徳の高かった叔母のために、韻を踏まない銘を記した。それは自分を大切に養育してくれた叔母の死を偲（しの）び、うわべを飾るのではなく、真心のこもったことばを捧げようとしたためである。

④ 杜甫は恩人であった叔母のために、韻を踏まない銘を記した。それは恩返しできなかった後悔の念ゆえ、「嗚呼」と詠嘆するぐらいしかことばが見つからず、巧みな韻文に整えられなかったためである。

⑤ 杜甫はたくさんの善行をのこした叔母のために、韻を踏まない銘を記した。それはあらゆる美点を書きつらねては長文になるので、韻は割愛してできるだけ短くしたためである。